

八月がくるたびに憂鬱になること

(『週刊金曜日』「西川伸一の政治時評」没原稿・2012年8月執筆)

八月がくるたびに私を憂鬱にさせる「国民的」行事がある。いわゆる「夏の甲子園」(全国高等学校野球選手権大会)だ。

炎暑の中、郷土の誇りを背負った高校球児が白球を追う姿が美しいとされている。大会歌の「栄冠は君に輝く」の三番の歌詞には、「美しくにおえる健康」とある。しかし、私にはこれほど不健康なスポーツ大会はないのではないかと考えてしまう。

甲子園球場の気温は連日三〇度を軽く超える。直射日光にさらされる選手たちにはそれ以上に感じられよう。暑さから身体を守る指数である「ヒート・インデックス」(体感気温)は、温度と湿度、さらには日差しの強さから算出される。たとえば、「気温三三度で湿度六五%、かつ快晴の日差しの下」なら体感気温は四九度に達する。これは熱中症の危険が差し迫った数値である。

七月二九日に、新潟市で野球部の高校一年生が市道脇の斜面で倒れているのが発見された。すでに息絶えていた。前日午後の部活動で、ランニングの途中に熱中症で倒れたのではないかと推定されている。その日の午後一時で、現地の気温は三三度だった。

少々大げさにいえば、高校生の「死亡遊戯」を「国営放送」が全国中継して、それを国民が感動してみているのだ。酷暑など敢闘精神で克服できると、非科学的な精神論をこの番組を通して、国家は国民に刷り込んでいるのではないか。

外国人の目にはどのように映るのだろうか。かつて巨人でプレーしたウォーレン・クロマティはこう書いている。「八月に高校野球というのを観たが〔中略〕クソ暑い中で、まるで明日がないみたいに切羽詰まった顔でプレーしていた。高校生のピッチャーは一年中毎日二〇〇球も投げ込むから、選手生命が短い。」(『さらばサムライ野球』一二八頁)

確かに高校野球の最大の犠牲者は投手である。予選からすべて「明日がない」トーナメント方式なので、勝ち進むとエースは連投を強いられる。母校のため、郷土のため、勝つことが最優先されるから、投手寿命への配慮はおろそかになる。やはり巨人でプレーした桑田真澄は、これを指して「勝利至上主義」と批判する。クロマティはプロでも投げ込みばかりの練習や連投を辞さない投手起用が珍しくないことに、「俺には頭がおかしいとしか思えない」とさえ言う。ま

さにそうなのだ。だがそれが美化されるから、さらに始末が悪い。

大洋（現・横浜 DeNA）や日本ハムで監督を務めた近藤貞雄は、現役時代に連投で投手寿命を縮めた。その彼の言葉を引こう。「炎天下の連投を、「母校の名誉のため、腕も折れよと」などと形容して美談に仕立てるマスコミが、あたら名投手の素質をどれくらい潰してきたことか。」（『野球はダンディズム』一四六頁）

そういえば、スポ根アニメの代表作である「巨人の星」の主題歌の二番にこうある。「腕も折れよと投げぬく闘志 熱球うなるど根性」いくら「根性」があっても、腕が折れては投球できまい。「竹槍で **B29** を墜とせ」を連想させるような、合理的根拠なき根性論がまだまかり通っている。

日本学生野球憲章は学生野球を教育の一環と位置づける。ならば、高校球児に合理的思考を育むために、「夏の甲子園」など廃止すべきではないのか。（文中敬称略）